

様式③

提出日 2021 年 1 月 22 日

2020 年度 琉球弧研究支援 報告書

「護佐丸・阿麻和利の乱について
～これまでの研究整理と新たな視点～」

氏名：新垣 雄大
所属学部学科：経法商学科

I. 初めに

第一尚氏王統、二代目の尚巴志は17年もの間、国王として君臨していたが、以降の尚忠から尚金福の三代はいずれもわずか4～5年という短い在位期間であった。尚金福の死後、王位を争って王弟の布里と王子の志魯が対立する反乱が起こった。結果、第六代国王に尚泰久が即位したが、権力基盤が不安定であったため、地方の有力按司である護佐丸と阿麻和利が勢力を拡大させていった。護佐丸・阿麻和利の乱とは、そのような時代背景の中で起こった事件である。

本研究を実施するにあたり、筆者の先祖が事件とどのように関連しているのかについて調べることから始まった。調査を進めていくと、従来の歴史観とは異なる様々な言い伝えなども伝わっており、知れば知るほど謎の多い事件という印象が強まっていった。だが逆に、発想を変えて、一体何が事件の真実なのか、新たな視点で事件の真相を探ることも面白い試みではないかと考えるようになった。そこで本研究では、事件の真相について多くの資料を用いながら可能な限り探っていき、自身で新たな視点をも探ってみたい。

II. 研究の目的、動機

本研究の動機は、2年ゼミで歴史を学ぶ中で、自身の先祖について関心をもったことがきっかけであった。色々調べるうち、筆者の先祖は琉球王国時代の有名な武将であることが分かった。さらには、その先祖が歴史上有名な「護佐丸・阿麻和利の乱」に関与したことが判明したので、先祖の関わりという視点から同事件について調べてみたい、というのが本研究の動機である。

III. 研究方法、地域、期間

研究方法：資料収集、文献調査、

地域：中城村、うるま市

期間：7月～9月 資料収集（護佐丸会館、西原町立図書館、沖縄県公文書館）

10月～12月 フィールド調査（場所：中城城跡、勝連城跡）

12月～1月 執筆

IV. 結果

王府の公的記録としての正史である『中山世鑑』、『中山世譜』、『球陽』の3冊の内容分析を行ったところ、いずれも「護佐丸は善人」で「阿麻和利は悪人」という一辺倒の結論であった。しかし、『異本毛氏由来記』という史料には、従来の護佐丸像とは異なる書き方がなされていた。それは、たとえば他の史料では、護佐丸が王府軍に攻められる際に、護佐丸は善人であったため、親戚関係である王府軍に抵抗しなかったとされているが、『異本毛氏由来記』では、「身命露計も惜まず防戦仕り候得共、多勢に無勢、当り雖も打ち死に仕り候に付き、護佐丸にも最早、運命尽き果て候事と思召れ候。」（命も惜しまず

に闘ったが、大勢に対して劣勢であり、粘ったが討ち死にしそうになったので、護佐丸はもはや運命尽き果てたものと思われた」と書かれている。この記述と王府側の記述を比較すると、下表のようになる。

参考文献	内容
『中山世譜』	阿麻和利は悪人。護佐丸は善人。 阿麻和利が中城城に攻めた際は、護佐丸抵抗しなかった。
『中山世鑑』	阿麻和利は悪人。護佐丸は善人。 阿麻和利が中城城に攻めた際は、護佐丸抵抗しなかった。
『球陽』	阿麻和利は悪人。護佐丸は善人。 阿麻和利が中城城に攻めた際は、護佐丸抵抗しなかった。
『異本毛氏由来記』	阿麻和利は悪人。護佐丸は善人。 阿麻和利が中城城に攻めた際は、護佐丸抵抗した。

V. 考察、分析

まずは阿麻和利の考察から考えてみたい。首里王府記録の3冊と『又夏氏大宗由来記』では、いずれも阿麻和利について「国を奪う心あり」と記されている。また、「悪人の標本で最悪の人間」としても評されているが、阿麻和利は北谷屋良村百姓の出身で、10歳になるまで歩行もできないほどの虚弱体質であり、山に捨てられたとも伝えられている。そこからどのようにして成長過程を歩んだのかは不明だが、親に捨てられ、壮絶な人生体験をした阿麻和利だからこそ、悪人になる素質があったと述べている資料もある。

しかし、こうした従来の阿麻和利像とは裏腹に、平成以降、現代版組踊「肝高の阿麻和利」が上演されるようになると、これまでの阿麻和利のイメージを一新するほどのインパクトを呈するようになった。それにより、特に阿麻和利の地元である勝連では、阿麻和利はもはや反逆者でもなければ悪人でもなく、勝連の発展に貢献した偉人とされている。

一方の護佐丸については、先に述べたように、資料によって評価が分かれている。『異本毛氏由来記』は、首里王府記録とは異なり、毛氏一族に伝わる話を後世に残すために編まれたものである。あくまで筆者個人の見解だが、もし私が護佐丸の立場であったならば、たとえ善人であっても追いつめられれば反撃だってしないわけにはいかないだろう。従って、王府史料に見る「護佐丸・阿麻和利の乱」に対して、以下の疑問点を抱いている。

- ・ 毛氏家譜や王府史料では一貫して阿麻和利を悪人と決めつけているが、勝連のおもろには、阿麻和利を賛美した歌謡が多くみられる。そのことの意味は何か。
- ・ 護佐丸の三男とその乳母は、一体どのようにして城から脱出できたのか。
- ・ 大城賢雄が付き人として勝連城に行ったのはなぜか。
- ・ 大城賢雄が百十踏揚と一緒に脱出した理由は何か。

この中でも特に疑問なのは、筆者の先祖である大城賢雄がなぜ付き人として勝連城に行っ

たかという点である。また、大城が阿麻和利の謀反を知ったとして、なぜ百十踏揚と一緒に向かったのか。最終的に、阿麻和利に嫁いだはずの百十踏揚が、阿麻和利亡き後に大城と結ばれていることから、そもそもの2人の関係性については色々と検討の余地がある。

結局のところ、この事件については、どれが正しいと決めつけるほどの根拠資料には乏しいと言わざるを得ない。また、王府は自分たちに都合のいいように史料を編纂することも今回の調査で分かったので、王府の史料だからといって簡単に信頼することはとても難しいと感じた。実際、事件後に王府史料に記録された時点ですでに200年もの時間が経過しており、同時代でないことが信憑性を低くしている要因でもある。そのため、史料分析には、史料そのものを疑うという視点が何より大事だと学んだ。

VI. 今後の展望

今回はコロナ禍の影響で実現できなかったのですが、今後は、地域住民への聞き取り調査を行い、地元でどのように伝えられているのかを拾い集めたいと考えている。次に、『異本毛氏由来記』の内容分析を行いたい。『異本毛氏由来記』は首里王府とは相反する視点で事件を描いているにもかかわらず、王府に発禁されずに現在まで伝えられた数少ない貴重資料である。該史料の分析ができれば、事件の新たな全貌が分かるかもしれないと期待している。

VII. 終わりに

今回は残念ながら思うように調査ができず、王府史料を覆すほどの根拠資料を見つけることはできなかった。だが、本研究を通して、王府史料や王府の歴史観そのものに疑問を抱いたので、最後の私の悪あがきとして、自分なりの「護佐丸・阿麻和利の乱」の顛末を述べてみたいと思う。ただし、これはあくまで私の創作であることは先に断っておく。

この事件の黒幕は、大城賢雄と百十踏揚だと考える。百十踏揚の付き人として勝連城に赴いた大城賢雄は、付き人として百十踏揚に接する中でいつしか彼女に好意を抱いたのではないだろうか。やがて両想いとなった二人は結婚を意識し始め、次第に百十踏揚の夫である阿麻和利を殺害しようと企てたのではないだろうか。阿麻和利殺害後、二人は勝連城を抜けだし、首里へ逃げたのであろうが、その後の勝連城は実際に、大城賢雄を含む王府軍によって落城させられてしまっているのだ。王府をも味方につけての阿麻和利討伐に成功した二人は、その後、実際に結婚している。ただし、これは推測だが、阿麻和利の死後、二人の関係を知った百十踏揚の父である尚泰久王が、娘の過ちを隠すため、史料などで一方的に阿麻和利の悪人説を強調したのではないだろうか。つまり、この事件の背後には大城と百十踏揚の不倫騒動があったと考えている。ただし、二人には子どもはおらず、百十踏揚は身を隠すかのように玉城に逃れ、大城とは別の墓に埋葬されている。

VIII. 参考文献、調査協力

- ・羽地朝秀『中山世鑑』沖縄県立博物館所蔵
- ・蔡温『中山世譜』沖縄県立博物館、尚家本
- ・球陽研究会編『球陽』角川書店、1973年
- ・筆者本『異本毛氏由来記』沖縄県立図書館蔵
- ・中城村史編集委員会『中城村史』中城村役場、1994年
- ・福田恒禎『勝連村史』勝連村役所、1966年

IX. 指導教員コメント

今回、新垣さんは、琉球史の中でも同時代史料がもっとも少ない古琉球時代の歴史解明に挑戦した。研究のきっかけは、琉球史上有名な「護佐丸・阿麻和利」に関わった大城賢雄が、新垣さんの先祖であり、ルーツであるという事実であった。まずは大城賢雄について調べたい、何より大城賢雄に関わった「護佐丸・阿麻和利」について知りたい、というのが、本研究の動機である。

最初に、王府側の史料を収集し、王府の事件に対する見方、立場、評価などを把握することから始めた。しかし、世界規模なコロナ禍により研究のスタートが遅れてしまった。せめて夏期休暇には、事件に関連する史跡を廻って欲しかったのだがそれも上手くいかなかった。さらには、感染症拡大を懸念して、現地での聞き取り調査もほとんど実施できなかった。こうした研究上の障壁に苦みながら、どうにか方針を変換して、収集できうる限りの資料の内容分析に焦点を絞った。どうにか事件の概要を掴むことはできたが、登場人物たち一人一人の家譜を網羅するまでには至らなかった。特に、大城賢雄の子孫が編修した『夏姓大宗由来記』についても触れて欲しかったのだが、今回はその分析はできなかった。卒業論文でも同テーマについて扱うとのことなので、今後は以下の史料分析も行って欲しい。そうすれば、結論部分で書かれていた空想による事件の顛末ではなく、たとえ推測に近い形であっても、従来の王府史観を覆すくらいの意欲的な研究成果が得られるのではないかと期待している。

➤ 「護佐丸」について

『毛氏由来記』と『異本毛氏由来記』の2つがあり、どちらも護佐丸家に伝わる歴史書である。護佐丸の視点で事件を描いている。

➤ 「阿麻和利」について

家譜などの史料は管見の限り不明だが、伊波普猷「阿麻和利考」、田名真之「尚泰久の治世-阿摩和利の乱と仏教」などの先行研究をもっと収集して読み込んで欲しい。

➤ 鬼大城『夏姓大宗由来記』